

はじめに

いた がき りゅう た チョン ビョン ウク
板垣 竜太 ・ 鄭 炳旭

1945年10月、広島と長崎に原爆が落とされてからおよそ2ヶ月後、ジャーナリストにして作家のジョージ・オーウェルは、ロンドンで発行されていた民主社会主義系の雑誌『トリビューン』に「あなたと原子爆弾」というエッセイを寄稿した¹。そこでオーウェルは、近い将来、核兵器をもつ2、3の超大国が世界を分割し、「平和なき平和 (peace that is no peace)」という代償を払いながらも大規模な戦争に終止符を打つ時代を迎えるかもしれないとし、その状態を「冷戦 (cold war)」と呼んだ。これが「冷戦」という語の初出とされる。オーウェルが「平和なき」とあえて付け加えたのは、原爆が「搾取された階級や人民の反抗の力をすべて奪い取る」ものであり、超大国ではない「報復し得ない人民」に対しては原爆を使用したり、それをもって威嚇したりすることがあり得ると考えたからである。その4年後にディストピア小説『1984年』を上梓する作家にふさわしいこの近未来の予言は、米国とソ連という核兵器を保有する超大国間に全面戦争が起きなかったという点などにおいて部分的に正しかったが、東アジアにおいて間もなく朝鮮戦争その他の「大規模な戦争」が起きるなど、「冷戦」の世界秩序構築過程において、いわゆる第三世界を舞台に「熱戦」が頻発するこ

¹ George Orwell, "You and the Atomic Bomb," *Tribune*, October 19, 1945 (Sonia Orwell and Ian Angus eds., *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell: Volume IV In Front of Your Nose 1945-1950*, Secker & Warburg, 1968, pp.6-10所収)。オーウェルは、米国、ロシア (ソ連)、そして場合によっては中国も核兵器を持ち、世界を3分割する可能性を予期していた。

とになった点までは見通せていなかった。

それから60年余りの歳月が過ぎ、ソ連や東欧をはじめとする旧社会主義圏の文書館などを渉猟し、「新しい冷戦史」研究の第一人者となったオッド・アルネ・ウェスタッドは、米ソ間のグローバルな対立と、脱植民地化の過程および第三世界の新興諸国の形成とを結びつける視点から、20世紀後半の歴史を描き出すにいたった²。アジア、アフリカ、ラテンアメリカにおける反植民地革命および新国家の創造のうねりが、「自由の帝国」米国および「公正の帝国」ソ連の対外介入と出会う場に注目するこの視点は、間違いなく重要である。と同時に、その枠組によって実にさまざまなことを論じることができるであろう東アジアの脱植民地化と冷戦という問題が、ウェスタッドの著書では（中国を除いて）絶望的なまでに省略されていることに、私たちは目を向けざるを得ない。1945年の大日本帝国の敗戦と解体にとともに、東アジアは解放、占領、分断、帰還、引揚げ、建国などの激動の時期を再び迎えた。さらに、台湾2.28事件（1947年）、^{チェジュ}濟州4.3事件（1948年）などの国家テロリズムや、中国の国共内戦、朝鮮戦争などの「熱戦」を経験しながら、東アジアの冷戦秩序が形成されていった。本書は、冷戦が世界規模では一応の終結を見て四半世紀経ってもなお「グローバルな冷戦」研究の視野にしっかり入ってきていない「東アジアの冷戦」を、むしろ議論の中心に据える。

しかしながら、本書は、ワシントンやモスクワあるいは各国の指導者たちを主語とするような「東アジアの冷戦史」の叙述を目指すものではない。本書は、その歴史を、その時代を民間人として生きた諸個人の視点から描き出そうとする試みである。あらかじめ明確に述べておきたいことは、個人に焦点を絞るからといって、本書が国際関係史を中心とした冷戦の「全

² O. A. ウェスタッド（佐々木雄太監訳）『グローバル冷戦史：第三世界への介入と現代世界の形成』名古屋大学出版会、2010年。

体史」に対応する「部分史」を描こうというものではないということである。いかに各国の文書館から大量の公文書を集めて歴史を叙述しても、それは冷戦の「全体」を描いたということにはならず、それもまた特定の観点から構築された「部分史」でしかない。一方、いかなる個人も諸関係の網の目のなかで生きているのであって、その社会的なつながりはグローバルに開かれている。個人を出発点とした「グローバル冷戦史」もあり得るのである。

個人から出発する冷戦史の叙述を試みるうえで、本書が目にするのは日記である。本書所収の全ての論文は、多かれ少なかれ日記を資料として用いる点において共通している。日記という資料を扱うのにはさまざまな困難さともなうものであるが、それに見合うだけの魅力がある。その魅力の一つは、それが目的論的ないし結果論的な歴史叙述に抗するための手がかりとなり得るということにある。私たちはふだん生きていて、明日世界が、いや自分自身さえもどうなるか正確に予測することはできない。ましてや本書で扱うような激動の時代においては、多くのことが流動的であって、誰もがその「全体像」を見通せない状況であった。今日の私たちは、南北朝鮮の分断が70年以上も続いてしまうことを知っているし、あの超大国ソ連が崩壊したことも知っている。しかし当時の諸個人は、そうした帰結を知るよしもなく、かれらを取りまく客観的な諸条件とそれに対する個々の主観的認識にもとづき、その都度判断し選択しながら生きて（あるいは死んで）いった。日々綴られる日記は、その当時のリアリティに迫るのに絶好の資料である。そこに刻まれた経験を読み解くことは、後代に住む私たちの目にはむしろ見えにくい何かを照らし出し、新たな冷戦像の構築の端緒を導き出す可能性を秘めている。

一つ例を挙げよう。1945年9月8日、米軍の艦隊が仁川^{インチョン}港に上陸した。これに対し、建国準備委員会の保安隊員や朝鮮労働組員が連合国の諸国旗を掲げ歓迎の行進をしていたところ、日本人の特別警察隊員が発砲し、

その銃弾を受けた^{クオンピョングン}權平根と^{イソグ}李錫雨という2人の男性が即死した³。米軍と日本人側は行事自体が不法であったとし⁴、朝鮮人団体側は平和的な歓迎の行進だったと主張した。ところで、そもそも米軍は朝鮮半島の日本人を武装解除するため進駐してきたというのに、なぜ敗戦国側の日本人が銃を所持して朝鮮人を射撃することができたのか。実は、当時これと似た銃撃事件は数多く起きていた。そうした諸事件の発生の背景には、沖縄から朝鮮半島に向かう米軍と朝鮮軍（朝鮮に駐屯していた日本軍）が幾度となく交信し、朝鮮半島というところは「共産主義者」が多い危険な地域であるから、米軍の安全のためには当面日本人警察・軍隊に依存しなければならないと伝えていたという事実があった⁵。こうした米軍と在朝日本人のあいだの反共の連帯と支配の引き継ぎを通じて、38度線以南では相対的に「平和」的な日本人の引揚げが可能となった。この「平和」は、その後朝鮮半島が左右対立を中心軸とした「熱戦」地帯と化していくことを代価としていた。權平根と李錫雨の死亡事件は、脱植民地化の困難な道のりと冷戦のはじまり、「平和」と「熱戦」の相互関係的な併存を象徴する場面であったということができる。

だが、それはその後の歴史過程を知り、当時は機密であった情報を知ってはじめて見えてくる歴史像である。では、その事件の起きていた時代と場所に実際生きていた人は、この事件をどう見ていたのか。太田修が近年

³ 『毎日新報』1945年9月12日2面。なお、当時の在朝日本人側による事件の認識については、森田芳夫『朝鮮終戦の記録：米ソ両軍の進駐と日本人の引揚』（巖南堂書店、1964年、274～275頁）にまとめられているように、「赤旗をもった朝鮮人の群衆が、警察の警備区域を突破しようとした」ため起きた事件というものであった。

⁴ 1945年9月2日、米陸軍第24軍団長として朝鮮占領の司令官を務めたホッジ中将は、南朝鮮の民衆に対して「日本人に反対する示威行為または米軍の歓迎行為に参加してはならない」との文言を含む布告を出していた（국사편찬위원회 편 『주한미군사 I』 국사편찬위원회, 2014, 93쪽）。

⁵ 李圭泰「8.15 전후 조선총독부의 정책」『翰林日本學研究』8, 2003.

研究を進めている仁川の電気工 I 氏は、同じ9月8日付の日記の紙面上部に「WELCOME U.S. ARMY」と2度書いたうえで、その日のできごとを描写している⁶。長くなるが以下、全文を訳出してみよう。

昨日上陸することになっていた米国第24軍は、天気の関係で今日仁川港に上陸した。高い山から海上を見れば、米国艦隊が軍艦や輸送船などが数十隻に増えており、その隙間には上陸船艦が相当あって、軍人を棧橋まで運んでいた。空中には飛行機が大編隊で百機ほど飛んで仁川上空を警戒している。今日会社では作業もなかった。午後2時ころ、私は仁川裁判所の屋上で上陸の光景を見たのだが、そのとき上陸してきた米軍10名が日本軍の案内で裁判所内に入ってきて、さまざまな書類等を見たのち、屋上に米国旗を掲げた。米国軍人はいつも笑い顔であり、たまにわれわれに英語で話しかけてきた。英語を知らないわれわれは、英語で「アイ・ノウ」と言うだけだった。道路には朝鮮の青年たちが連合軍の国旗をみな掲げて、千名ほどの行列をしていた。旗には「朝鮮独立万歳」とか、その他の文句を書いて持っていた人もいた。この行列が裁判所の前に来たとき、仁川警察署から警官が出てきて、ピストル拳銃で撃って負傷者が出て、歓迎は中止となり、四散することになった。こんな光景だった。午後5時には米国軍人が市街を交信した。本当に活発な軍人たちだった。年齢を聞くと19歳だという。そしてどの軍人であれ親切だった。

⁶ 太田修「朝鮮解放直後におけるある労働者の日常：仁川の電気工 I 氏の日記から」（鄭炳旭・板垣竜太編『日記が語る近代：韓国・日本・ドイツの共同研究』同志社コリア研究センター、2014年、343頁）にその日の記事全文が掲載されている。なお、I氏は“ARMY”という語を最初“AMRY”および“AMERY”と誤記し、それを線で消して訂正している。そこから、彼ががんばって「正しい英語」を書こうとする姿が読み取れる。

当時19歳だったI氏にとって、米軍はまごうことなき解放軍であって、占領の任務にあたっていた若い軍人たちもフレンドリーに感じられた。そうしたなかで、目の前で起きた発砲事件は、きっと大きな騒動であったに違いないのに、驚くほどあっさりとした記述で済まされている。裁判所内に米軍側を案内したのが日本軍であることは分かっているが、それと発砲事件とのつながりについて見えているようには思えない。それよりも朝鮮解放の喜びの方がまさっていたのか、むしろ英語の実力のなさを実感して勉強しなければと思うのであった（I氏は早速同月から英語講習所に通いはじめた）。こうした価値観が当時どれほど一般的であるかは不明であり、どのような立場で占領軍と出会ったかによって全く異なる経験もあったと考えられる。だが、それでもこの日記の記述は一つのリアリティを提示しているとともに、私たちに多くの問いを投げかけてくる。この米国への信頼感は何に淵源するのか。押しつけられていた日本語と、自ら用いようとする英語との違いは何なのか。米軍の朝鮮民衆への警戒心と、その兵士たちがかれらに見せた「笑い顔」とは、どのような関係にあったのか。解放軍への歓迎のなかで、解放過程の暴力が見えにくくなるという朝鮮民衆の心性は、どのように形成されたのか。こうした問いに答えようとするためには、また新たな研究を必要とするし、そのことこそが個人の日記から出発する冷戦史の可能性を示している。本書は、その一つの試みである。

本書の原型となっているのは、2016年3月5日に同志社大学で開催した国際シンポジウム「日記からみた東アジアの脱植民地化と冷戦」である⁷。タイトルには「東アジア」と付しているが、地理的に東アジア全域をカバーしようというものではない。台湾、中国（朝鮮族）および日本（主に大日本

⁷ 「脱植民地化」が書籍のタイトルからは消えているのは、決して脱植民地化を軽視してのことではなく、むしろ先述のように冷戦という歴史過程のなかに脱植民地化が否応なく組み込まれることになったという点を踏まえてのことである。

帝国)にまたがってはいるが、その軸足はあくまでも朝鮮半島にある。その理由を理論的に説明することも可能だが、それよりも直接的な理由は、本書が同志社コリア研究センター(DOCKS)と高麗大学校民族文化研究院(RIKS)との共同研究の成果だからである。以下、本書の成立経緯を説明しよう。

DOCKS と RIKS の HK 韓国文化研究団「個人の伝統と近代研究チーム」(現「植民地冷戦文化研究チーム」)は、2011年より共同研究を進めてきた。2012年からは、日記を中心とした個人記録(ego-documents)に関する共同研究を開始した。同年6月には、本書の編者2人とドイツのチュービンゲン大学のイ・ユジェ(You Jae Lee)氏の研究ネットワークのなかで、高麗大学校において国際シンポジウム「日記を通じてみた伝統と近代、植民地と国家」を開催した。その成果は、韓国と日本でそれぞれ編著として出版している⁸。こうした流れで、2013~15年度の2年半のあいだ、DOCKS と RIKS の国際共同研究「朝鮮半島と日本を越境する植民地主義および冷戦の文化」が、日本学術振興会の「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」(2013-15年度)に採択され、個人記録研究もここに組み込むことになった⁹。前編著が植民地期にかなりの比重を占めていたことに鑑み、それに続く共同研究では朝鮮の植民地からの解放後に中心を据えることにした。その最終年度に企画したのが、先述の国際シンポジウムである。シンポジウムを構成するに際して、大日本帝国からの脱植民地化と冷戦が折り重なる状況を台湾の視点からも検討するために駒込武氏を招いた。また、現代韓国の日記を近年精力的に収集、公開し、研究を進めていた全北大学校の

⁸ 韓国では『일기를 통해 본 전통과 근대, 식민지와 국가』(소명출판, 2013)として、日本では『日記が語る近代：韓国・日本・ドイツの共同研究』(同志社コリア研究センター、コリア研究叢書1、2014年)として、それぞれ刊行した。

⁹ なお、RIKS は、台湾中央研究院(Academia Sinica)台湾史研究所の許雪姬氏とのつながりのなかで、2014年5月に国際シンポジウム「日記と多様な近代」をソウルで開催した。

「SSK 個人記録と圧縮近代研究団」とも新たに連携し、安勝澤氏と李成浩氏を招くことになった。

こうして開催した国際シンポジウムを基礎に、各筆者からあらためて寄稿していただいた論文を編集しなおしたものが本書である¹⁰。表1に本書所収論文の内容を一覧としてまとめた。一見して分かるように7本の論文に登場する9人の主人公¹¹は、属性も主たる居住地も多様であるし、さらには中心的に扱っている時代もばらばらである。そのうち、生前に活字の文章を公刊したことのある「インテリ」が3名（林獻堂¹²、金壽卿^{キムスギョク}、金琬燮^{キムクワンソプ}）、農民（精米業者を含む）が3名（權純徳^{クォンスンドク}、申權植^{シングォンシク}、崔乃宇^{チュエネウ}）、電気工（I氏）・弁士（崔海元^{チュエヘウォン}）・韓薬師（朴來昱^{パクレウク}）が各1名である。社会主義圏に居住している朝鮮人が2名（金壽卿、崔海元）で、残り7名は非社会主義圏の居住者である。全て男性であるという点だけは共通しているが、これは入手しえた日記資料をベースに研究を進めるほかない状況のなかで、女性の書いたものがそもそも稀少であったことから来る偏りであって、今後の研究においては何とかして克服すべき限界である。本書では、これらの論文をおよそ時代順に並べ、2部構成で配置した。本書はある意味「通史」的な歴史叙述から最も遠いところで企画されているため、このような配列は望ましくないかもしれないが、読者の便宜を考えてのことであり、理解いただければ幸いである。

¹⁰ 本書収録論文はシンポジウムの報告文そのままのものではなく、全て大幅に加筆訂正されているか、差し替えられたものである（巻末の初出一覧も合わせて参照されたい）。

¹¹ 李松順論文に登場する4名中1名は、安勝澤・李成浩論文の主人公と同一人物である。

¹² 本書で漢字表記をするにあたっては、原則として新字体を用いるが、人名についてのみ原表記にしたがった。朝鮮系の名前については初出時にカタカナでルビを振ったが、中国・台湾系の名前については日本の漢音で読むという慣習にしたがってルビを振らなかった。

表1 本書の内容一覧

	論文筆者	主人公	属性等	主な居住地	中心的な時代
1	駒込武	林獻堂	政治リーダー	台湾	1945年
2	太田修	I 氏	電気工	仁川（韓国）	1950-51年
3	板垣竜太	金壽卿	言語学者	北朝鮮	1950-51年
4	廉仁鎬	崔海元	弁士	中国東北部	1963-68年
5	李松順	申權植、崔乃宇、朴來豆、權純徳	農民、韓薬師ほか	韓国農村部	1970年代
6	安勝澤・李成浩	權純徳	農民	金泉（韓国）	1970-80年代
7	金成妍	金玼燮	作家	ソウル（韓国）	1943-44年に獄中で書いた日記の戦後出版

世界規模では、ベルリンの壁崩壊、東欧革命、ソ連解体などによって冷戦が終結したことになっているが、東アジアでは冷戦期に形成された緊張関係が今もなお継続している。それは国家体制だけの問題ではなく、そこに生きる人々の心性にも深く影響を及ぼしてきた。その心性へと歴史的に分け入ることは、緊張関係を緩和し、継続する〈東アジアの冷戦〉と未完の脱植民地化を成し遂げるためには、不可欠の作業であると考えられる。本書がその一助となれば幸いである。

（謝辞）本書は JSPS 科研費 JP25370843 の助成を受けた成果である。本書を出すに当たっては、多くの方々のお世話になったが、ここでは編集補佐にあたった西村直登さん（同志社大学）の名前をまず挙げておきたい。彼の周到な仕事があれば、本書をまとめることができなかった。本書のもとになったシンポジウムは、柳美佐さん（当時、同志社コリア研究センター・研究支援員）の準備と事後処理があれば成立し得なかった。また、「コリア研究叢書」1～2に続き、本書の装幀も大本幸恵さんが引き受けてくださり、コンセプトをよく反映したデザインを提供していただいた。ここに合わせてお礼申し上げる。